

[社 会]

生徒自身による主体的な学習を目指した指導の工夫

— 「身近な地域の歴史」学習を取り入れた中学校社会科の実践 —

長野 朋水*

1 主題設定の理由

中学校社会科における「身近な地域の歴史」学習の果たす役割がしだいに大きくなっている。

平成元年(1989)告示の「中学校学習指導要領(社会)」の歴史的分野の目標では「身近な地域の歴史や地理的条件にも関心をもたせながら理解させる¹⁾」とあるのに対し、平成10年(1998)版では目標の(4)を新たに設け、「身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味や関心を高め²⁾」となった。内容でも、「歴史の流れと地域の歴史」が独立した項目として新たに設けられ、「身近な地域の歴史を調べる活動を通して、地域への関心を高め、地域の具体的な事柄とのかかわりの中で我が国の歴史を理解させるとともに、歴史の学び方を身に付けさせる³⁾」とあるように、調べ方や学び方が重視されるようになった。

さらに、平成24年(2012)年4月1日から施行された現行の平成20年(2008)版では、内容に「受け継がれてきた伝統や文化への関心を高め⁴⁾」が新たに加わることで「身近な地域の歴史」学習をより一層重視する姿勢が明確になった。

中学校社会科において「身近な地域の歴史」学習を取り入れることは、生徒自身による主体的な学習の場が増え、そのことで学ぶ意欲の向上も予想される。従来、多くの生徒にとって歴史とは何か遠い世界のできごとと感じられ、単にそれらを暗記することに注意が払われてきた。それは、中学校社会科の授業形態が教科書に記載された重要事項の確認に終始するなど、知識の注入に陥りがちであったことに起因する。中学校社会科では扱う内容が多いわりに時数が制限されていたり、入試教科の一つとして点数を獲得する役割が大きく期待されている。しかし、このような授業者による知識注入型の学習では、生徒自身による主体的な学習場面は少なく、得られた知識も時間の経過とともに、しだいにそれぞれの記憶から消し去られる傾向にあった。また、生徒の学ぶ意欲も学習が進むにつれて低下する傾向にあった。

本来、「身近な地域の歴史」と教科書に記載された重要事項は、切り離された別のできごとではない。何気ない身近な地域の歴史的事象が、実は日本全体や世界的規模の歴史とも深くかかわっていることがある。小学校では社会科や総合的な学習の時間を通して「身近な地域の歴史」にかかわる学習が行われており、歴史的な素材がある現場に行き、見て、聞いて、体験することが多い。それに対し中学校では、この学習の意義については認められながらも、先に述べた理由などからあまり積極的に行われていなかった⁵⁾。

ただし、小学校と中学校では発達段階や扱う内容など事情が異なり、同じ手法を繰り返しても効果がない。本実践では、生徒自身による主体的な学習を目指して「身近な地域の歴史」学習を取り入れた。教科書に記載された重要事項にもつながる、身近にありながら意外に知られていない地域の歴史や具体的な事象を取り上げ、それらについて自身の考えを述べたり、他の考えを聞く場面を設定する。これらを効果的に行うことにより、学ぶ意欲の向上もはかまできると考えた。

2 研究内容と方法

(1) 単元名

欧米の進出と日本の開国

(2) 研究方法

① 中学校社会科における「身近な地域の歴史」学習の実態と意義

筆者は、平成18年(2006)に新潟県上越市・妙高市内のすべての小学校社会科主任と中学校社会科担当者を対象に

* 上越市立城北中学校

「身近な地域の歴史」にかかわる学習についてのアンケート調査を行い、その結果を分析、考察した。小学校については主として「身近な地域の歴史」にかかわる学習の実施状況を知ることが目的とし、中学校については「身近な地域の歴史」学習に対する社会科担当者の考えや実施状況について、質問した。

ほぼすべての小学校において、4年間（3～6年の社会科や総合的な学習の時間）の中で「身近な地域の歴史」にかかわる学習が実施されている。平成10年（1998）版の「小学校学習指導要領（社会）」の3・4年で、地域に残る文化財や年中行事、地域の発展に尽くした先人の具体的事例について学習するとしていることもあり、特に4年生での実施率が高い。次いで、6年生での実施率が高い。具体的な内容は史跡見学や人物学習、戦争体験者による講話や体験者への聞き取り調査などである。

一方、中学校では、社会科担当者の73%が「身近な地域の歴史」学習が必要であると考えているにもかかわらず、「身近な地域を調べる活動」の実施率はわずか14%であり、授業の中で全くふれない人が35%もいた。この理由として、扱う時間的余裕がないこと、小学校ですでに実施されているので必要ない、などが考えられる。

かつて、秋山正道は「金谷山から日本をみる」という視点から、開国から戊辰戦争に至る動きについて、薩長対幕府という中央の歴史の構図からではなく、両者の間でゆれ動いた高田藩の立場を実感させる授業を行った⁶⁾。筆者はこの「金谷山から日本をみる」という解釈を踏襲しつつ、身近な地域の歴史を窓口として、日本全体や世界的規模の歴史を展望することが、中学校社会科における「身近な地域の歴史」学習を考える上で重要であると考え。そして、この視点を活かすことで、生徒の学ぶ意欲は向上し、知識も定着すると予想する。

② 指導過程における工夫

現行の学習指導要領の歴史的分野の内容では、「(1)歴史のとらえ方」を設定している。この大項目は、「ア 我が国の歴史上の人物や出来事などについて調べたり考えたりするなどの活動」「イ 身近な地域の歴史を調べる活動」及び「ウ 学習した内容を活用してその時代を大観し表現する活動」からなる。このうち、ウは新たに項目として設定されたものである。

「身近な地域を調べる活動」によって、具体性や実感をもたせながら、日本全体や世界的規模の歴史を展望させたい。さらに「時代を大観し表現する活動」によって、多くの事象を個別に覚えるだけでなく、各時代の特色が理解できることが重要である。

単元では、「(5)近現代の日本と世界」のイの中に、上記の(1)イ・ウを組み入れた。

本単元のねらいの一つは、「アの欧米諸国のアジア進出と関連付けて取り扱う」（内容の取扱い）ようにし、幕府が対外政策を転換して開国したことと、その政治的及び社会的な影響を理解させ、それが明治維新の動きを生み出したことに気付かせることである。このうち特に後者については、身近な地域を例として具体的な変化をとらえさせるように工夫したい。

「開国とその影響」については、まず、高田藩が外国船に備えて台場を築くなど、海防の強化を図った事実について紹介する。また、単元のまとめの段階では、金谷山のふもとに戊辰戦争の犠牲者の墓があることを知らせ、高田での戊辰戦争の様子や、戦後に高田藩預かりとなった会津藩士への態度について、さまざまな立場から考えさせる。その際、資料として『上越市史』⁷⁾や『わが上越 歴史と生活』⁸⁾などの関連する部分を提示する。これらの資料を参考にして、上越における「開国とその影響」について知り、自分なりの考えをまとめる。自らの考えを発表し、他の人の意見を参考とすることで、上越における「開国とその影響」についての考えをさらに深めさせる。

(3) 単元と生徒

① 単元について

当校は上越市のうち、旧高田市街地の北部を校区としている。高田は、小藩分立の越後において江戸時代を通して最大級の城下町であったが、開国の影響は例外なくこの地にももたらされる。一つには、高田藩が治めるこの地が海に接し、この地に暮らす人々が外国船を目にする機会があり、それらに備えて台場が築かれたことである。そして、もう一つは戊辰戦争である。高田藩は徳川氏の譜代大名でありながら、新政府軍の進軍によって新政府軍と旧幕府軍との狭間で大いに悩み、当初は曖昧な態度をとった。新政府軍の進軍経路の資料などから、新政府軍にとって最前線にあたる位置にあることに気付かせる。一方、旧幕府軍にとっても高田は最前線であった。金谷山のふもとに残る戊辰戦争の犠牲者、薩長や会津藩士の墓の存在を授業で取り上げることで、これまであまり知られていない身近な地域の歴史の一面を知らせ、考えさせる。そして、上越の「開国とその影響」について知ることで、日本全体の当時の状況について実感させたい。

② 生徒の実態

事前に行ったアンケート調査によると、「歴史が好き（または、どちらかといえば好き）」「中学校社会科での歴史的分野の授業が好き（または、どちらかといえば好き）」と答えた生徒が、ともに全体の6割を超えた。

一方で、多くの生徒は社会科を単なる暗記教科としてとらえ、知識量のみで学力の優劣を判断する傾向も強い。「中学校社会科での歴史的分野の授業が嫌い（または、どちらかといえば嫌い）」と答えた生徒の理由では、「覚えることが多くて大変である」といったものが多くを占めた。これは授業者による一方的な知識の注入、すなわち従来の中学校社会科の授業形態が継続している証でもある。そこで、情報を収集、分析し、それを交換しながら考えを深める場を授業の中でさらに多く設定することで、生徒自身による主体的な学習の場面を増やし、学力の多面性についても気付かせたい。その結果、生徒の学ぶ意欲も向上すると思われる。

3 指導の構想

(1) 単元の到達目標

- ・開国の影響とその後の幕府政治の推移について、意欲的に追究している。また、身近な地域における動きに興味をもち、進んで追究している。
(社会的事象への関心・意欲・態度)
- ・開国の影響とその後の幕府政治の推移について、政治面・経済面・社会面から考察している。また、身近な地域における動きにかかわりをもたせるなど多面的・多角的に考察し、公正に判断している。(社会的な思考・判断・表現)
- ・開国の影響とその後の幕府政治の推移について、身近な地域の動きにかかわりをもたせながら追究し考察した過程をまとめている。
(資料活用の技能)
- ・開国から江戸幕府滅亡までの経過のあらましについて、身近な地域の動きとあわせて理解し、その知識を身に付けている。
(社会的事象についての知識・理解)

(2) 単元の指導計画 (全6時間)

段階	学習内容	学 習 活 動	時間
第1次 欧米諸国の近代化とアジア侵略	近代革命の時代	<ul style="list-style-type: none"> ・日本に影響を与えた欧米諸国が、近代革命を通して近代国家を形成したことを確認する。 ・欧米諸国の近代化に興味をもち、資料を使って調べる。 	3時間
	産業革命と欧米諸国	<ul style="list-style-type: none"> ・産業革命を経て、経済のしくみや社会が大きく変化したことを確認する。 ・革命の時代を経て、近代国家を確立する動きが欧米諸国に広がっていく過程を知る。 	
	ヨーロッパのアジア侵略	<ul style="list-style-type: none"> ・イギリスを中心とした欧米諸国が、工業製品の市場や原料の供給地を求めてアジア侵略を進めた過程を確認する。 ・欧米諸国の侵略に対して立ち上がった民衆の動きを知る。 	
第2次 開国とその影響	開国と不平等条約	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な直江津海岸でも外国船来航に備えて台場が築かれたことを知る。 ・ペリー来航から日米修好通商条約の締結に至る過程を調べ、開国の世界的な意義を確認する。 ・条約の内容や開国による国内経済への影響を、資料を使って進んで調べる。 	3時間
	江戸幕府の滅亡	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸幕府の滅亡の経緯を確認する。 ・開国による政治的・社会的な影響にふれ、それらが明治維新の動きを生み出したことを知る。 	
	上越における戊辰戦争 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> ・金谷山のふもとに残る戊辰戦争の犠牲者、薩長や会津藩士の墓の写真を見せ、これは何か、どこにあるかを問う。 ・高田藩は旧幕府軍と新政府軍のどちらについて戦ったのかを予想する。 ・高田藩が新政府軍側について戦った理由を考える。 ・上越における戊辰戦争のあらましを知り、単元の学習をふりかえる。 	

(3) 指導の実際

第1次では、教科書の記述内容を中心としながら、欧米諸国の近代化とアジア侵略のあらましを確認した。欧米諸国の侵略に対しては、中国やインドにおいて組織的な抵抗があった。しかし、近代化された欧米諸国の軍事力で制圧され、侵略がさらに進んだ事実を確認した。

第2次では、まず、身近な直江津海岸でも外国船来航に備えて台場が築かれたことを知らせた。その痕跡を現地で確認することは困難ではあるが、文献資料でその事実を伝えることで実感を伴わせたい。そのうえで、ペリー来航から日米修好通商条約の締結に至る過程について資料を基に調べ、開国が単に日本国内にとどまらず、中国や朝鮮にも影響を及ぼすなど、世界史的な意義をもっていたことを確認した。また、日本にとって不利な条約の内容や開国による国内経済への悪い影響について、資料を使って調べさせた。さらに、開国による政治的・社会的な影響にふれ、それらが江戸幕府の滅亡、明治維新への動きへとつながったことを知らせた。単元のまとめの段階では、上越における戊辰戦争について、資料を基に調べ、考えさせた。

4 本時の指導

(1) 本時のねらい

- ・上越における戊辰戦争について、自らの考えをまとめ、他の人と意見を交換する。
- ・他の人との意見交換を経て、上越における戊辰戦争についてのあらましを知り、単元の学習をふりかえる。

(2) 本時の構想

当校社会科の重点目標の一つに、「資料や他の人の考えから学んだり、自らの考えを発信したりしながら、社会的事象をより多面的にとらえ、より公正に判断する能力と態度を育てる」との記述がある。これは言語活動の充実を目指した現在の学習指導要領の方針とも合致する。

本単元では、欧米諸国の近代化とアジア侵略を学習した後、第2次の開国とその影響について学習する段階へと入る。第2次ではまず、直江津海岸でも外国船来航に備えて台場が築かれたことを知らせた。そのうえで、ペリー来航から日米修好通商条約の締結に至る過程について資料を基に調べさせた。さらに、開国による政治的・社会的な影響にふれ、それらが江戸幕府の滅亡、明治維新への動きへとつながったことを知らせた。

本時ではこれまでの学習をふまえ、上越における戊辰戦争について、資料を基に調べ、考えさせた。まず、金谷山のふもとに残る戊辰戦争の犠牲者、薩長や会津藩士の墓の写真を見せ、これは何か、どこにあるかを問うた。次に既知の情報を活かしながら、高田藩は旧幕府軍と新政府軍のどちらについて戦ったのかを予想させ、理由も考えさせた。さらに、高田藩が新政府軍側について戦った事実を知り、その理由を考えさせた。その際、自分の考えをしっかりとまとめ、他の人と意見交換することを重視したい。上越における戊辰戦争のあらましを知ることを通して、単元の学習をふりかえり、実感させることで関心・意欲を高め、知識に深みを増したい。

(3) 本時の展開

時間	●学習活動 ・ 予想される生徒の反応	▲教師の支援	■評価 *留意点
10	●金谷山のふもとに残る戊辰戦争の犠牲者、薩長や会津藩士の墓の写真を見て、これは何か、どこにあるかを考える。	▲授業プリントを配布する。 ▲電子情報ボード上に写真を示す。	■写真を見て、自分の考えを積極的に発表したか。 (関心・意欲・態度)
30	●上越における戊辰戦争について、予想を立てる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">戊辰戦争で高田藩は旧幕府軍と新政府軍のどちらの側で戦ったのだろうか。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・旧幕府軍・譜代大名であるから 幕府の影響が強いから など ・新政府軍・新政府軍の進軍経路から 周囲の藩が新政府軍側 など 	▲高田藩が譜代大名であったこと、新政府軍の進軍経路、周囲の藩の様子を知ることができ資料を示す。	■資料を参考にして、自らの考えをまとめようとしたか。 (思考・判断・表現) (技能) ■積極的に自らの考えを発表したか。(関心・意欲・態度) *多様な考えが紹介されるように指名もする。

	<p>●上越における戊辰戦争についての資料を読み、高田藩が新政府軍側について経緯を知り、その理由をまとめる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 高田藩が新政府軍側について戦ったのはどんな理由からか。 </div> <p>●各班でそれぞれの考えを発表し合う。</p> <p>●各班の代表が学級全体に対し、班で出た内容を学級全体に発表する。</p>	<p>▲高田藩が新政府軍側について経緯（大いに迷った結果であること）がわかる資料を示す。</p> <p>▲互いの発表について、評価項目をもとに、客観的に評価させる。</p>	<p>■資料を参考にして、自らの考えをまとめようとしたか。（思考・判断・表現）（技能） *課題の把握が難しい生徒にはヒントを与える。</p> <p>■積極的に自らの考えを発表したか。（関心・意欲・態度） ■他の人の発表を聴き、公正に判断することができたか。（思考・判断・表現）（技能） *班で出た内容をすべて紹介させる。</p>
10	<p>●上越における戊辰戦争のあらましを知り、単元の学習をふりかえる。</p>	<p>▲他の地域や日本全体とのかかわりについて、簡単にふれる。 ▲授業プリントに記入させる。</p>	<p>*各地の戦いの場所を地図上で確認させる。</p>

(4) 本時の実際

導入では、金谷山のふもとに残る戊辰戦争の犠牲者、薩長や会津藩士の墓の写真を見て、これは何か、どこにあるかを問うた。少数ではあるが実際に見たことがある生徒もいて、それらの生徒が金谷山にあると答えた。

次に、「戊辰戦争で高田藩は旧幕府軍と新政府軍のどちらの側で戦ったのか」を個人で予想させた。27%の生徒が旧幕府軍側、73%の生徒が新政府軍側と答えた。旧幕府軍と答えた生徒の理由を見ると、譜代大名として徳川家に恩義を感じていると答えたものもあった。しかし、生徒の多くは高田藩が曖昧な態度をとったため新政府軍に疑われて仕方なく旧幕府軍についてと予想した。新政府軍側と答えた生徒の理由では、すでに大政奉還によって徳川家は朝廷に政権を返上していることや、新政府軍側が勝ち進んできた事実から、有利な方についてと答えたものが多かった。

さらに、上越における戊辰戦争についての資料を読み、高田藩が新政府軍側について経緯を知り、その理由をまとめさせた。以下にその一部を紹介する。

- ・旧幕府は負けると思い、高田藩を長く続けるには新政府についての方がよいと思ったから。
 - ・新政府の命令に反抗できなかったから。 ・信州の諸藩が高田に攻め込もうとしていたから。
 - ・新政府軍がはじめに高田藩に来て、新政府軍の方が強くなっていたから。
 - ・新政府軍側が勢いについていたから。 ・新政府軍に追いつめられたから。
 - ・徳川家の悪事を思い出したから。 ・旧幕府軍のとった行動が嫌だから。

理由の多くは資料を読み、それらから導き出せるものだが、中にはこれまでの学習から自分なりの予想を立てたものもあった。

各班でそれぞれの考えを発表し合い、互いの発表について、表現（声が大きく、聴きやすいか）や内容（できごとや理由が的確であるか）を、A（よい）・B（普通）・C（いまひとつ）の3段階で評価させた。その後、各班の代表が学級全体に対し、グループでの話し合いの内容を発表した。

最後に、他の人の意見を聞いての感想などを授業プリントに記入させ、本時の締めくくりとした。



【写真】金谷山に残る薩摩藩士の墓

5 実践の成果と今後の課題

(1) 実践の成果

第2次の「開国とその影響」の学習の前後に、「身近な地域の歴史」学習に関するアンケートを実施した。【資料】参照。それぞれの項目で「そう思う」と答えた生徒が増え、「全く思わない」は減ったか、または、いなくなった。劇的な変化は認められないながらも、身近な地域の歴史を取り上げ、生徒自身が主体的に学習する場面を設定したことで、全体としては、生徒の学ぶ意欲は向上し、知識の定着を実感した生徒が増えたと考える。

(2) 今後の課題

第一に、資料の選定と提示の仕方を挙げる。今回、生徒は「高田藩が新政府軍側について戦ったのはどんな理由からか」について考え、意見を交換した。生徒の意見の基礎となる資料や提示の仕方が適切なものであったか、よく吟味する必要がある。

第二に、第1次から第2次への展開の仕方を挙げる。本実践では身近な地域の歴史を窓口として、日本全体や世界的規模の歴史を展望することを目指した。その所期の目的を達成できるかどうか、再検討が必要である。

第三に、他の単元においても、生徒自身が主体的に学習することを意識した「身近な地域の歴史」学習を実践したい。

【資料】生徒を対象とした「身近な地域の歴史」学習に関するアンケート調査の結果（95名）

(事前) あなたは、身近な地域の歴史に関心があるか。 (事後) 今後、あなたは身近な地域の歴史について、学習したいか。		そう思う	やや思う	あまり思わない	全く思わない
	事前	8%	43%	41%	8%
	事後	19%	32%	41%	8%
(事前) 身近な地域の歴史を学習することで、あなたの歴史全般に対する意欲は高まると思うか。 (事後) 学習したことで、意欲は高まったか。		そう思う	やや思う	あまり思わない	全く思わない
	事前	8%	53%	26%	13%
	事後	22%	40%	38%	0%
(事前) 身近な地域の歴史を学習することで、あなたの歴史全般の知識はより深まり、広がるか。 (事後) 学習したことで、知識は深まり、広がったか。		そう思う	やや思う	あまり思わない	全く思わない
	事前	22%	48%	22%	8%
	事後	22%	59%	19%	0%

注

- 1) 文部省「中学校学習指導要領」(1989.3.15告示)の「第2章 各教科」「第2節 社会」〔歴史的分野〕「1 目標」の(2)による。
- 2) 文部省「中学校学習指導要領」(1998.12.14告示, 2003.12.26一部改正)の「第2章 各教科」「第2節 社会」〔歴史的分野〕「1 目標」の(4)による。
- 3) 文部科学省「中学校学習指導要領」(2008.3.28告示)の「第2章 各教科」「第2節 社会」〔歴史的分野〕「2 内容」の(1)イによる。
- 4) 注3)、「2 内容」の(1)イによる。
- 5) 羽田秀樹「中学校社会科における地域学習の現状と課題」(『社会科地域学習の方法』明治図書, 1990)や長野朋水「中学校社会科における『身近な地域の歴史』学習に関する研究」(『上越社会研究』22号, 2007), 志田福二・岩永健司「中学校『身近な地域の歴史学習』の授業開発研究—単元『碓氷線の歴史と現在』の開発—」(『群馬大学教育実践研究』26号, 2009)は、実施調査から「身近な地域の歴史」学習があまり実施されていないことを伝えている。
- 6) 授業については、以下に掲載されている。
秋山正道「幕藩体制の崩壊と越後高田藩」新潟県上越教師の会『地域に根ざす教育と社会科』あゆみ出版, 1982, pp.243-260.
- 7) 上越市史編さん委員会『上越市史〈普及版〉』上越市, 1991, pp.175-176. 上越市史編さん委員会『上越市史 通史編4 近世二』上越市, 2004, pp.214-220.
- 8) 新潟県社会科教育研究会『わが上越 歴史と生活』上越市中学校長会・新潟県社会科教育研究会, 1992, pp.34-37.